

4-1-1-3 成人期診療科

1. 概要、特色

1.1 概要

成育医療センター開設に伴い、従来の縦割り診療体系ではなく全人的な診療を目指して総合診療部が設置された。成人期診療科は小児期診療科、思春期診療科と共に総合診療部に属し、成人期年齢を中心におこる疾患や生活上の問題などに取り組む診療科と位置づけられている。

1.2 特色

担当するスタッフは内科医（従来の医療システムにおける16歳以上の診療のプロ）であり、基本的に16歳以上の当センターの患者さんを診療する。小児期より健康上の問題が継続するキャリアオーバーが社会的に自立することを助けるとともに、自立出来ない場合の対応の方法を検討する。また、従来の小児科医が守備範囲としなかった16歳以上に健康上の問題点が発生した患者さんの診療を担当する。また将来子どもをつくる予定のある成人の健康管理を積極的に行う。

2. 診療活動、研究活動

2.1 診療活動

成人期診療科は2名のスタッフ（平成15年8月北洞医長が退職してからは1名となった）が、総合診療部レジデント及び母性内科スタッフ・レジデントと共に病棟および外来診療を行っている。成人期診療科の対象疾患は16歳以上の内科疾患であるが、高度に専門化された内科診療体制の確立は当センター内だけでは困難であるため、近隣の医療機関との連携も考慮しながら診療活動をおこなう。

2.1.1 外来診療

2.1.1.1 成人期外来

成人期診療科として、ごく普通の内科外来としての診療をおこなっている。16歳以上の初診患者さんについては、原則としてあらかじめスタッフと約束ができて（予約のある）場合に診療するシステムになっている。内科外来として当然のことながら、常勤スタッフの専門性が診療内容を大きく特徴付ける。梅田医師は呼吸器内科医であり、気管支喘息がなおらない、喘息があるが妊娠した、かぜが長引いている、禁煙したい、インフルエンザ対策をしたい、検診胸部レントゲン写真で異常を指摘されたときなどの診療を得意としている。まためずらしいことであるが梅田医師は呼吸器内科医でありながら心臓超音波検査を得意とし、北里研究所病院・慶應義塾大学・国立病院東京医療センター循環器科と連携して仕事をしている。ちなみに退職した北洞医長は消化器内科医であった。

2.1.2 入院診療

入院病棟は11階東・西病棟が成人期病棟として設定されていたが、スタッフの不足、患者数の不足により11階西病棟が閉鎖、現在は11階東病棟と10階東病棟を周産期診療部や他の診療科と共有して入院診療を行っている。入院患者の疾患は多岐にわたり、専門診療科入院患者にも関わっている。一般急性疾患、専門科にてフォロー中の患者の急性感染症（特に脳性麻痺等による長期臥床患者の急性病変）、外科系疾患の内科管理、いわゆる「専門診療のはざま」或いは他科にまたがるため主科の明らかな慢性疾患、などが挙げられる。やはり常勤スタッフの特徴を反映し、慢性呼吸器疾患の患者さんの入院診療が多い。

2.2 研究活動

成人期診療科では今のところ常勤スタッフ個人レベルのテーマで臨床研究・基礎的研究を行っている。梅田医師は慶應義塾大学医学部呼吸循環器内科学教室の共同研究員である。

2.2.1 特発性線毛機能不全症候群

Kartagener's syndrome, immotile cilia syndrome, primary ciliary dyskinesia を包括する疾患名。よりよい診断・治療方法の開発に対する興味もさることながら、患者さんの医療費自己負担分を軽減するシステムがないことに大きな疑問を感じており、広く情報収集を行っている。

2.2.2 免疫・アレルギー疾患

アレルギー疾患の患者さんの肺に発現する遺伝子を包括的に解析するなど、当センターの研究所と協同で難病の病態解明を試みている。

2.2.3 心エコー図デジタルファイリングシステム構築

低コストで便利な心臓超音波検査のデジタルファイリングシステムを普及させようと試みている。

3. 研修、セミナー

学会主催のハンズオンセミナーや当センターのイブニングセミナーなどで心エコー図デジタルファイリングシステム普及のための活動をおこなっている。